研究課題名：明石歩道橋事故における新聞報道の分析―責任帰属と世論形成の観点から見た災害報道―
真島理恵　北海道大学大学院文学研究科修士課程一年
研究課題名：利他行動の成立―選別的利他行動の適応的基盤―

広報活動の報告

広報担当　菅原健介

●次回の大会から参加、発表登録がＷＥＢ上で簡単にできるようになりました。学術情報の電子情報化推進のために、ぜひともご利用いただきたいと思います。詳しくは、一号通信をご覧下さい。

●国立情報学研究所電子図書館サービス（NACSIS-ELS）に『社会心理学研究』のバックナンバーを登録いたしました。間もなく、同より検索閲覧が可能となります。ただ、現状では閲覧のために個別的な登録手続きが必要となっています。詳しくは、以下のＵＲＬをご参照ください。（http://www.nii.ac.jp/els/els-j.html）

●社会心理学会のホームページ上から、会員の研究情報を公開するための自動登録システムが稼動しております。どうぞ積極的にご利用ください。

①会員検索システム：氏名、所属機関、研究領域、連絡先など
②社会心理学書籍データベース：会員の著作物情報、紹介文
③第四三回社会心理学会発表論文集（Ｗｅｂ版）：前回大会の発表論文の掲載と、配布資料、関連サイトへのリンク
④社会心理学の広場：会員の個人ホームページの紹介とリンク

尚、登録には会員番号とパスワードが必要です。いずれも、次回四四回大会の一号通信に同封されています。

意見・異見（その十八）

社会心理学者はマッド・サイエンティストか?!

―映画「ｅｓ」が創り上げた虚構の「社会心理学」―

大阪大学　三浦麻子

まず当欄恒例のセルフ・ハンディキャッピングを。大坊先生から執筆依頼を受けたのは昨年末。なぜ私にお鉢がと訝ったのだが、映画「ｅｓ」について書けないか、とのこと。「確か先生もご覧になったんじゃ……」と抗いたい気もしたが、まあそこはそれ、なんとか試みます、とお引き受けした次第である。しかし調査を進めるうちに、会報で取り上げるよりもむしろ外向け啓発に力を注ぐべきトピックであることが徐々に明らかになった。拙文はその端緒として、この映画の存在とその問題点を会員の皆様方に知っていただくためのものであるとご理解願いたい。

「心理学会に論争を巻き起こし、今も訴訟問題に揺れる心理実験を完全映画化！」
「あまりのリアルさに世界が驚愕！裁判中のアメリカでは未だ公開不可能な問題作」

実に刺激的な惹句である。サワリだけでも社会心理学に触れたことのある者なら、おそらくこれだけでモデルになった研究が何であるか見当がつくに違いない。「ｅｓ」（原題「Das Experiment」）は二〇〇一年にドイツで製作された映画である。日本では昨年六月二二日の東京公開を皮切りに全国八都市で公開された。単館上映でありながら各所でかなりの観客を集め、十数週のロングランとなった都市もあった。私が観たのは八月一八日（大阪公開二日目）であったが、整理券が上映一時間前に捌けるほどの人気であった。

まずは日本の公式サイト[1]をご覧いただきたい。一見すれば、モデルがジンバルド（スタンフォード大学教授・現ＡＰＡ会長）による監獄実験（一九七一年）であることが強調されていることがおわかりいただけるだろう。そして件の「完全映画化」「問題作」というフレーズに代表される、どきつい言葉の連続によるドキュメンタリー性のアピール。おそらくこれを読む人は「映画は歴史的事実に基づくもの」と解釈するに違いない。数ヶ月遅れて昨秋アメリカで公開された折のプレス資料と比較すると、これらは日本配給サイドの意図的演出とも見て取れる。

では、映画の内容はどうだったかというと、残念ながら「完全」とは言い難い。いやむしろジンバルド自身がＡＰＡ会報のコラム[2]や私信[3]で語ったように、特に後半は事実[4]から完全に逸脱し、セックスとバイオレンスに塗り固められたひどいありさまだった。映画的には息もつかせぬ緊迫した展開という演出効果は抜群だったわけだが……。私が何より驚いたのは、実験終末と中止直後に二名（囚人役一名、看守役一名：後者は明確に「死んだ」描写はないが）の死者を出していること、そして実験実施の責任者たる「教授」が、実験に対してあまりにも無責任な態度を取っていた（ように描写されていた）ことだった。死者が出たのは看守役がコントロールルームを襲って実験者らを傷つけ、監獄を「支配」したことに起因するものだったのだが、教授は状況の悪化を認識しつつも実験者らにすべてを任せきりにし、その場を離れていたのだ。心理学者は人間の「ｅｓ」を捉えるためなら何でもやる、とでもいいたいのだろうか？

そしてもう一つ私にとって意外なことがあった。パンフレットに社会心理学者のコメント[5]があったことだ。この映画は（特にnaiveな視聴者にとっては）「社会心理学者公認」なのだ！　正直に言おう。私もこのコメントを見た時にこう思った。「ジンバルドこんなことやってたんか！　まだ裁判が続いてんのに平気な顔してＡＰＡ会長ってどういうことやねん!?」

もちろんわれわれ専門家が冷静に読めば、コメントが「映画」に関するものではないことは想像がつく。おそらくはプレス資料用に執筆された「監獄実験に関する解説」から（あたかも映画に関する

コメントであるかのように）抜粋された文章なのだろう。しかし、せっかくの専門家のコメントも、このように誤解を招きかねない形で利用されてしまってはたまったものではない。

本稿の依頼を受けたことで改めてこの映画と監獄実験に関する多くの資料にあたり、それなりの「事実」を検証できた今、私はこの映画を見たすべての人々に対して、そこに含まれる虚構と真実についてデブリーフィングしたい気持ちで一杯である。この映画は確かに実際にあった社会心理学実験をモデルにしてはいるが、事実と fatal に異なる部分が多く含まれていることを、そして、真実はどうであったかということを伝えずにはいられない。少なくとも現在では（単にこの実験が禁止されているだけではなく）研究のあらゆるプロセスにおいて厳しく実験者倫理が求められ、また遵守されていることも熱を込めて語りたい。

もちろんその一方では、実験状況下で生じた「匿名性の暴力」についても正しく伝えなければなるまい。演出上曲げられた部分があったにせよ、模擬監獄で生じたさまざまな予期せぬ暴力がジンバルドらの実験を中止に至らしめたことは事実である。特に現代では、姿形のないネット上でのヴァーチャルな（言葉の）暴力が、そこにだけ留まるのではなく、現実社会に影響を及ぼしている。しかも、インターネットは監獄ではない。誰に対しても開かれ、善良な看守も実験者も存在しない。そこでの暴力がとてつもない危険性を孕んでいることはあまり意識されることがなく、それゆえに危険性も高い。この映画から学ぶべきことがあるとすれば、これは「過去の事実の完全映画化」ではなく「現在のわれわれの姿」であるかもしれない、という危機感ではなかろうか。現在の社会心理学は、ともすれば個人への還元主義偏重の傾向にあるように感じられるが、「状況の力」すなわち社会的状況の影響力の大きさを認識し、正しく社会に訴えていくことは重要である。しかし、重要であるからこそ、その手法は慎重に検討されねばなるまい。

まだ語り尽くせぬ思いは残るが、既に紙幅を大幅に超過してしまった。この映画はいろいろな意味で社会心理学者にとって必見の作品であることは間違いない。[6] 本年早々に DVD/VIDEO 化がなされ、レンタルも可能なので、とにかく一見をお勧めする。

注

1 「e s」公式サイト。http://www.es1.jp/

2 Murray, B. (2002, March) Film criticized as irresponsible: A German movie claiming ties to the Stanford Prison Experiment spurs controversy over when reality ends and fiction begins. *Monitor on Psychology*, 33. http://www.apa.org/monitor/mar02/filmcritic.html

3 西田公昭先生（静岡県立大学）宛。筆者の問い合わせに快くご協力くださった西田先生に深く感謝の意を表する。なお、ジンバルド氏によれば過去にも訴訟となったという事実はなく、一九七一年の学会で二度にわたって被験者の置かれた条件について証言したことがあるだけとのことである。

4 ここで言う「事実」とは、ジンバルド教授自身による監獄実験解説ウェッブサイト（http://www.prisonexp.org/）の記述に基づくものである。

5 コメントの内容は例えばここで読める。http://www.cinemawork.co.jp/kac/films/es.html
DVD/VIDEO リリース情報。http://www.ponycanyon.co.jp/wtne/dvd/030116eses.html

参考資料

i 「Das Experiment」公式サイト。http://www.entertheexperiment.com/

ii The Internet Movie Database. http://us.imdb.com/Title?0250258. 映画の詳細情報を入手できる。

iii Stanford Univ. ニュース。http://news-service.stanford.edu/news/august22/prison2-822.html. 監獄実験から三〇年とのコラムだが、この映画に関するコメントに大きな紙幅が割かれている。

第四四回大会一号通信の訂正

先日、お送りさせていただきました四四回大会一号通信に誤りがありました。

WEBによる論文集原稿の送付期限が七月五日（木）となっておりますが、曜日が誤っておりました。正しくは、一月五日（土）です。お詫びして訂正させていただきます。

編集後記

日本社会心理学会会報一五七号をお届けいたします。総会の議事録が詳しく掲載されておりますが、今回、学会活動委員会の答申に基づき学会の運営方針がかなり大きく変わりました。ぜひ目を通していただければと思います。

さて、大きく変わったと言えば、社会心理学会のWEBサイトのトップも大幅に変更いたしました。お気づきの方もいらっしゃるとは思いますが、最近の流行を取り入れて動きを出してみました。また、かなりスッキリとした形になったと思います。

従来、他学会の研究者や一般の人々にアピールしたい広報的な情報と、会員向けの情報がいっしょになっていて、読みにくかった点を整理したわけです。

基本的にトップページは一般へのアピールを中心にまとめ、会員向けのページと区別いたしました。トップのコンテンツとしては、学会の紹介、学会大会や公開シンポジウムの案内、社会心理学研究の目次と要約、学会大会の発表論文集、会員のホームページや会員の執筆した書籍の紹介コーナーなどとなっています。

そして特に強調したいのは、このトップページは皆さんが作るページだということです。上記のコンテンツの多くは、会員自らが登録可能です。学会発表、書籍、運営されているホームページなどの情報をぜひ登録してください。特に、書籍のコーナーですが、まだ登録者がなく、見本用にいれた私の本だけがさらし者状態になっていますので、ぜひよろしく。